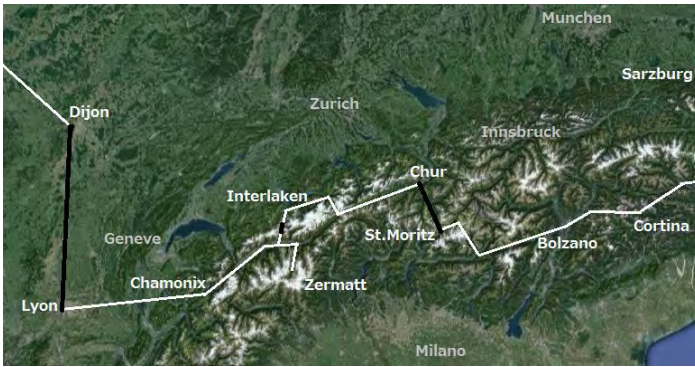


◇◇Alps 自転車紀行 2015.8.17-9.8◇◇

山崎開平(理学部 3 年)



走った道のり(黒線は鉄道利用)

私はこれまで中学は陸上、高校はクロカンスキーと部活動をやってきたが、それとともに父親の趣味に付き合う形で自転車競技をやっていた。一時はプロを考えたほど、真剣に取り組んだ。その後、大学山岳部に入って初めて山の魅力に気付き、人と競って相対的な勝利を求めるのではなく、自然の普遍的な美しさを求めることの素晴らしさを学んだ。今まで自転車ぐらいしか取り柄がなかった私にとって、山は世界を大きく広げた。2 年生になった頃、ひとつのプランが思い浮かんだ。自転車で海外の山を登ることである。2003 年頃からツール・ド・フランスをテレビで観戦してきたが、選手たちが大草原やアルプス、ピレネーの山道を颯爽と駆ける映像が、強烈な印象として残っていた。そして山岳雑誌で目にした、シャモニー尖峰群やドロミテの巨岩。もはや居ても立ってもいられなかった。3 年生となり、色々あって Haupt を務めることになった。夏休みは山岳部にとって、メンバーのレベルアップを図るための大切な時期である。しかし 4 年生になると院試や就活に追われて、計画が実行できるかは不透明だった。結局、私は自らの責務よりも自己実現を優先させた。夏合宿を終えると装備庫からソロテンを持ち出し、実家にとんぼ返りして、2 日の準備の後に出発した。1 年近く強請った結果、親から 20 万援助してもらった。自転車は実家にあった年代物の TREK で、スチールフレームのフルリジッド MTB にロードタイヤを履かせた。キャリアはリアだけで、父親の伝から借りた。自転車を空輸するのはなかなか手間だったが、何とかだった。フランスはパリからアルプスを經由してチェコのプラハまで、これから 3 週間の行程である。

仁川でトランジットしてシャルル・ド・ゴール空港に着いたのは日没間際だった。パリの名所を廻った後、コンコルド広場近くの茂みで蹲って夜を明かした。ブルゴーニュ地方は地平線が際限なく続き、パリからディジョンまでは 300km 程だが、丸 2 日かかった。当初はプラハまでの全行程を自転車で行くつもりだったが、トータルで 30kg 近い車体の重さもあり、早くも疲れ果てて、諦めて TGV を使った。欧州はクライミング・スキー・カヤック・パラセーリングなどのアウトドアスポーツの地

位が日本よりも高く、人々の対応の仕方、車両の設計を含めてサイクリストにも優しい。町の数だけキャンプ場があるのも、キャンピングカーでバカンスを楽しむ人が大勢いるからである。

シャモニーはアルプス最高峰モンブランの麓であるが、私の目当てはグランドジョラスだった。かの森田勝が長谷川恒夫とアルプス三大北壁(マッターホルン・アイガー・ジョラス)冬季初登を争った舞台でもある。ここで初めて宿を取り、2 日停滞した。しかし、幽玄に聳える尖峰群の向こう側、ジョラスが望めることは無かった。心残りを表した様な雨に打たれながら、峠を越えてスイスに入る。



最初にツェルマットを訪れた。ここはヴァリスアルプスの雄、マッターホルンの懐である。アルペンムード満点で、交通の要衝であり物々しい岩峰を擁すシャモニーとはまるで違う。宿に泊まるお金がなかったので、バックパッカーに混ざってドミトリーに入れられた。ここでは天気に恵まれた。朝一番で Oberrothorn(3414m)までトレッキングして、頂上で延々と、食るように景色を堪能した。マッターホルンという山は、どこか日本の富士山に似ている。有名になりすぎたことが山としての魅力を損ねてしまったが、山という枠組みでは語りきれない、よりシンボリックな存在として不動なのである。それを見ていた時間が、今回の旅のハイライトになるのかもしれない。ツェルマットを後にして、次はインターラーケンに向かう。その途中、ベルナーオーバーラントアルプスの西方、カンデルシュテグという山村の奥地にある Oeschinensee という湖に寄った。湖までの自転車での道のりは厳しく、前輪が浮き上がる程の勾配だ。苦労して坂を登りつめた先にあったのは、まさにアルプスの湖のイメージをそのまま具現化したような理想郷であった。インターラーケンに着いたら、翌日はユングフラウ三山を見るため麓のグリンデルヴァルドに向かうつもりだったが、キャンプ場からでもアイガー、メンヒ、ユングフラウが見えることに気付き、また既に身体が悲鳴をあげていたので、そこで停滞を決めた。三大北壁を見るのが一つの目標だったが、そのうちの 2 つを見たことになる。

ツーリングとしての目玉はここから先の峠道である。先ずグ

リムセル、フルカ、オーバーアルプの 2000m 級の峠を越えて、古都クールに行く。輪行でサンモリッツまで行き、最後の 4000m 峰ピッツ・ベルニナを間近に見ながらベルニナ峠を越えて(ここも悪くない)スイスを後にし、イタリア領ティラーノに入る。そこでアダメッロ山地の北側 SS42 を東進すれば、北イタリアの中心地ボルツァーノに着く。チロルというのはこの辺から、北はオーストリアのインスブルックにかけての山域をいう。ドロミテ山塊はここから更に東にある。セラ、ポルドイ、ファルツアレゴの 2000m 級の各峠をつなぐ道路はドロミテ街道と呼ばれ、ドロミテの中心地であるコルチナ(・ダンペッツォ)に通じている。セラ峠から見るサッソルンゴとコルチナのクリスタロ山塊は好一對の奇岩だ。コルチナまでは天気ももってくれたがここで運が付き、雨が寒々しく降りはじめた。そして精魂体力も尽きた。オーストリア最高峰、グロースグロックナーに至る峠道は、着雪の恐れもあったのであきらめた。プラハまで自転車では到底間に合わないので、旅はザルツブルグまでで終えることとした。宿で久々に食べた暖かいもの(スープ)の味は印象深い。結局、総走行距離は 2000km には届かなかった。

ところでザルツブルグの駅では、シリアからの難民を受け入れる準備が進められていた。また、11 月にはパリで同時多発テロも起きた。それに私が巻き込まれなくて良かったと人から言われるが、正直、私一人の命など取るに足らないと思ってしまふ。旅を通じて、素直・崇高・真面目…様々な印象の人に会った。その多くに対して、私は人として共感を持った。今はただ、彼らに平穏な日々が訪れるのを、日本から願うばかりである。

◇◇鳶(とんび)◇◇

田尻研治(S47 入部)

12 月 9 日快晴の逗子駅に降り立ちメンバー中島容子と 2 名で仙元山(せんげん)に登った。登山というよりハイキング報告である。

本題に入る前に中島容子について少々。ひょんなことから知り合った(わたしが男性も子育てを！と講演などやっているときに彼女が地元役所の男女共同参画の担当だった縁)もう 30 年近く一緒に山に登っている(毎年 2-3 回は行く)。2 人だけのときが多いが複数のときもある。彼女は立派な体格(要は太っている)でゆっくり歩く、それがわたしには具合が良い。須藤秀昭先輩ではないですが小生も変形性膝関節炎。涙ぐましいリハビリを日々繰り返すこと 1 年、やっと山靴を履いて。恐る恐るワンピッチ『大丈夫じゃないか』、さらにもうワンピッチ『結構、行けるじゃないか』少し余裕も出てくる。山道の土の匂い木々からもれる木漏れ日、『ああ、久しぶりだなあ』。気持ちも弾みだんだんと嬉しくなってくる。

2 時間も歩くと頂上の展望台に着く。見渡すと葉山の街並みがくっきりと見える。晴れ渡る青空に鳶がくると輪を描いている。海の彼方にぼんやりと富士山も。ベンチに座り今朝早起きして握ってきたおにぎりをほお張る。彼女にも上げる。嬉しそうに食べている。はっきり言って小生かなりシアワセだ。デザートに、これも持ってきたりんごをむいて 2 人でほおばる。まさにりんごを口に入れようとした瞬間、小生の口元からそのりんごが吹っ飛んだ。何が起こったのかさっぱりわからずうろたえる小生に彼女は「鳶が、」と言った。彼女は確かにその姿を見たという、そしてわたしの手からりんごを取って行ったのを。小生にわかには信じられずベンチの周りにりんごが落ちていないか探し回る。彼女は苦笑しながら「わたしは今朝りんごを食べてきたのでこれ(彼女の分)をどうぞ」。「鳶に油揚げ」とはよく言ったものだ。それにしてもわたしにその姿を見せることなく、高い空から手の中にある小さいりんごを、わたしの手には触れることなく、奪っていくなんてちょっと信じられない。よっぽどわたしが鼻の下を長くして目も空ろ気分は漫ろ(そぞろ)だったのだろうか。

◆寄稿

◇◇左衛門小屋テラス改修報告◇◇

小山紀一(S38 入部)、佐藤行彦(S42 入会)

編集:斎藤雅英(S31 入部)

件の熊・蜂騒動、つまり、壁面内部空間に営巣した蜂の巣を狙って、熊が剥がし廻った左衛門小屋外部壁面全面改装の構想時から指摘されていた次の作業、テラスの改修は、今後数十年保障つきで完了しました。基本構造は変わっておりません。なお、作業請け大工派遣業者への支払い、金物代、工費、経費、消費税を含む合計金額は、見積もりを下回る 96,120 円でした。